



北方民族博物館だより

No.126



H3.32 木製かぶりもの〈バイザー〉エスキモー アラスカ／北西部沿岸（推定）
17.5×10.0×4.5cm 19世紀後期

アリューシャン列島のアリュート、アラスカ南西部～北西部沿岸のエスキモーは、カヤックに乗って海獣狩猟を行うときに様々な形の「かぶりもの」を着用した。それらは海面の反射を避け、水しぶきから目を守る実用的な機能があった一方で、地域によっては着用者の地位を示したり、動物へ変身するための仮面的一种として見なされたりもした。本資料はつばだけの最もシンプルな形態のものであり、コッツビュー湾からノートン湾で類例が見られる。

目次 Contents

- 1 表紙 木製かぶりもの〈バイザー〉
- 2 第37回特別展「イヌイトの壁掛けと先住民アート」
- 3 /講座・講習会「カザフの手工芸／カザフの刺繍」
- 4 講座「ラポロアイヌネーションのこれまでとこれから」
/ロビー展「写真で振り返る日本のアラスカ調査2」
- 5 講座「北西海岸文化の起源と現在」
/講座「日本人研究者のアラスカ先史時代研究：その展開とダイナミズム」
- 6 INFORMATION

第37回特別展

イヌイトの壁掛けと先住民アート

2022.7.16-10.16

イヌイトの壁掛けの誕生

本特別展のテーマとなっているイヌイトの壁掛けはカナダのヌナブト準州（以前は北西準州）の町、ペーカレイク（カマニトゥアク）^{*}で誕生しました。

イヌイトはカナダ極北地方で狩猟採集生活を送り、自給自足と毛皮交易で暮らしを成り立たせていましたが、イヌイトをとりまく社会が大きく変化し、現金収入の手段であった毛皮交易が衰退してゆきます。

ペーカレイクには1950年代末にミシンがもちこまれ、女性たちには、カナダの都市部で販売される衣服づくりが奨励されるようになりました。このプロジェクトは軌道にのりませんでした。そのなかで衣服のはぎれから手袋や靴などの小物づくりを行い、壁掛けが誕生したといわれています。



会場の様子

イヌイトのアート作品と壁掛け

1940年代末にカナダ人芸術家であるジェームズ・ヒューストンがイヌイトの村を訪問しました。彼はこのときに見たイヌイトの石製彫刻に芸術の才能を見出し、アート作品づくりを奨励するようになります。石製彫刻のほか、日本で木版画の技法や浮世絵の分業システムを学んだヒューストンが指導した石刻版画が各地のイヌイトコミュニティで行われるようになり、新たな主要産業となっていきます。

できあがった作品は、厳格な品質管理の下で美術市場に運ばれ、イヌイトのアート作品が広く知られるようになります。そして1970年代にはいと、壁掛けと織物（タペストリー）がイヌイトアートに加わります。

イヌイトのアート作品は、現在イグルータグとよばれる

商標をつけて管理されています。壁掛けにも商標がつけられ、その意味でも壁掛けはイヌイトアートに位置づけられます。



二十四の顔／マーサ作

イヌイトの壁掛けの特徴

壁掛けのアーティストのほとんどは女性です。イヌイトの女性たちの間に長年受け継がれて、一家の命を守ってきた衣服縫製の技術が活かされています。ただし壁掛けの素材は毛皮ではなくウールであり、縫い糸も動物の腱ではなく木綿糸や刺繍糸や毛糸です。ダッフル地とよばれる厚手の生地、それよりは薄いフェルトやトナカイのなめし皮を切り抜いてモチーフをつくりつたものをアップリケし、さらに刺繍や毛皮の装飾をほどこして完成させます。

ダッフル地も、モチーフとなるフェルトも、縫い糸も、現実にはあまり見られない独特の配色がされています。

壁掛けのテーマ

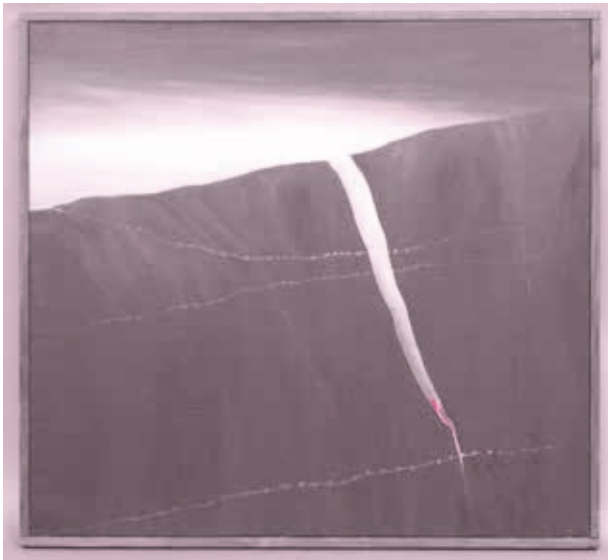
本展で展示した壁掛け72点のうち、70点はイヌイトアートコレクターの岩崎昌子氏が収集したものです。

岩崎氏は壁掛けのテーマには二つあるといいます。一つは自然や伝統的な生活、もう一つは民話、伝承、精神世界の分野です。

ホッキョクグマやトナカイ（カリブー）等の動物の姿や、極北の風景、かつて生活のまわりにあった各種道具の特徴が、卓越した観察眼でとらえられ、細かな針目を加えたり、装飾を加えたりといった工夫によって大胆かつ繊細に表現されています。

先住民アート

イヌイトだけではなく、北方諸民族出身のアーティストが多数活躍しています。なかには先住民という出自にこだわるアーティストもいます。その表現方法も、伝統的な素材や技法を使うこともあれば、油彩、インスタレーションという手法を使うこともあるなど様々で、作品には民族にちなんだメッセージがこめられています。例えば今回展示した、スウェーデンのサミのアーティストである、ローズ-マリー・フーヴァの作品は、抑圧されたサミの文化が復興する様子を表しています。



太古の力／ローズ-マリー・フーヴァ作
油彩 1983年

また、はじめは土産品として出発したものが、アート作品として評価されるにつれ、作り手がアーティストとしての意識を持つようになる例もみられます。ウイルトアの魚皮切り絵の作品は、土産品からアートへの変遷を同時代的に確認することができるものとして、先住民アートの成り立ちの一例を示しています。魚皮の切り絵がウイルトアのイメージを代表するかのようには扱われはじめており、民族のイメージが短時間でもつくられることがわかります。

先住民アートが興隆するためには、美術市場との適切な接続が必要になります。オーストラリアのアボリジナルアーティストであるフィリップ・グダイクダイ氏の図版の図録での使用にあたって、美術館からの画像の提供から著作権処理まで、実にスムーズに行うことができました。さらにオーストラリアではミュージアムが先住民アートを収集、展示するだけではなく、積極的に支援している姿も特筆すべきことです。

イグルータグのような商標もふくめ、各種制度の確立もこれからの先住民アートには必要なことでしょう。

(学芸グループ 笹倉いる美)

※ヌナブト準州の地名には英語表記、イヌイト語表記等があり、本展では英語（イヌイト語）のように表した

講座／講習会

カザフの手工芸／カザフの刺繍

2022.5.7

講師：廣田千恵子（千葉大学大学院後期博士課程）

長年カザフの文化について調査・研究をされている、廣田千恵子氏にカザフの手工芸に関する講座と講習会の講師を務めていただきました。

講座では、カザフのテント式住居「ウイ」内部の装飾と防寒・防塵を担う壁掛け「トゥスキーズ」を中心にお話いただきました。

カザフは、カザフスタン、トルコ、中国、ロシア、モンゴルなど広い地域に暮らしています。廣田氏はこのうちモンゴル国のバヤンウルギー県を主なフィールドにしています。ここは農林業にはむかないため、牧畜が主な生業です。得られるヒツジやラクダの毛も手工芸に使われます。例えばヒツジの毛はフェルトにするほか、紡いで糸にし、ウイを飾る紐が織られます。



廣田千恵子氏

トゥスキーズは平均すると130cm×220cmの大きな布に刺繍で文様が施されています。実用品、あるいは贈答品として作られる場合もあります。刺繍を行う際には、布を木枠に固定し、かぎ針をします。刺繍針を用いた刺繍に比べると非常に高速に仕上げることができます。もっとも講習会では、参加者のみなさんはかなり苦戦をされていました。施される文様は、私たちには唐草文様とみえるものが、ヒツジの角を表すなど牧畜生活を反映しています。

廣田氏は持参されたトゥスキーズを広げ、トゥスキーズとの出会いや刺繍家に弟子入りした経験についてもお話されました。

(学芸グループ 笹倉いる美)

講座

ラポロアイヌネイションの
これまでとこれから

2022.5.21

講師 差間正樹（ラポロアイヌネイション会長）
長根弘喜（ラポロアイヌネイション監事）
持田 誠（浦幌町立博物館 学芸員）



左から持田誠氏、差間正樹氏、長根弘喜氏

浦幌町から3名の講師をお招きし、ラポロアイヌネイション（旧浦幌アイヌ協会）の来

歴と今後の活動についてお話いただきました。

ラポロアイヌネイションは1970年に北海道ウタリ協会の浦幌支部として発足しました。1950年生まれの差間会長は若い頃から差別を経験し、アイヌであることを隠すようになっていました。しかし、ある時期から堂々と名乗るようになったところ、周りの態度が変わったといいます。それで浦幌アイヌ協会に入会して活動を始めました。一方、より若い世代である長根氏は差別をほとんど経験せず、自身がアイヌ民族であるということもあまり意識しないで成長しました。協会に入会したのも父に頼まれたからでした。

差間氏は1990年頃に浦幌アイヌ協会に入会後、北海道大学アイヌ納骨堂で行われていた先祖供養「イチャルパ」に参加するようになりました。学問の名の下に遺骨が一方向的に収集された経緯や、死者の尊厳を傷つけるような遺骨の保管状況を目の当たりにし、なんとかして先祖の遺骨を取り戻し、地元で供養しなければならないと感じました。そのため、遺骨を保管していた大学を次々に提訴し、2020年には浦幌から持ち去られた全ての遺骨の返還が実現しました。当初、遺骨問題にピンと来ていなかった長根さんら若い世代も、再埋葬やイチャルパの準備を進めていく中で、アイヌとしての意識が変わっていったといいます。

その後、ラポロアイヌネイションはサケに関する活動を開始します。サケを獲る特別な許可を北海道から得るために伝統的な丸木舟も作りました。会員の多くが現役の漁師でもあり、サケとは「切っても切れない」関係だと長根氏は言います。この取り組みとは別に、現在、ラポロアイヌネイションは先住権として浦幌十勝川でサケ漁を行う権利を求めて国と北海道を提訴しています。漁師でありながら先住民族としての漁業権を求めることによって、地元でも難しい立場に置かれることがあるようです。しかし、国際的な事例を見ても先住民族と入植者の漁業権は解決しなければならない問題であり、浦幌十勝川から現状を突破していきたいと差間氏はまとめられました。

（学芸グループ 野口泰弥）

ロビー展

写真で振り返る日本のアラスカ調査2

2022.5.21-6.19

主催：北海道立北方民族博物館

共催：北極域研究加速プロジェクト(ArCS II) 社会文化課題



会場の様子

昨年に引き続き岡田淳子当館元館長の協力の下、岡田宏明・淳子夫妻が撮影したアラスカ調査写真から、日本のアラスカ研究の歴史をたどる写真展を開催し

ました。夫妻が撮影したアラスカ調査写真は2万枚を超えます。文部科学省の補助事業として実施されている「北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）」の社会文化課題班では、2020～2021年度にかけてこの写真のデジタル化を進めてきました。今回の展覧会は1987～1999年の東南アラスカ調査の様子を52枚の写真から紹介しました。

写真展は二部に分かれており、前半で1987～90年のヘクタ島とプリンス・オブ・ウェールズ島の考古学的調査を、後半で1996～99年のアネット島メトラカトラの文化人類学的調査を紹介しました。

今回は岡田淳子氏が筆者と一緒に展示する写真を選定し、さらに岡田氏が写真一枚ずつに説明文を書いてくださいました。選定した写真には貝塚の断面図や出土遺物など専門性の高いものも含まれていましたが、その写真の意味や重要性を、実際に発掘を行って写真を撮影した岡田氏本人が解説してくださったおかげで、興味深く鑑賞している来館者の姿が多く見られました。



展示した写真と岡田淳子氏による解説文

遺物（石刃）が幅5mm長さ20mmと小さいので、細かく発掘し、土はプラスチックの箕に載せてブルーシートの上で、もう一度調べる。掘っているのはサウスポーの私（岡田淳子）。

（学芸グループ 野口泰弥）

講座

北西海岸文化の起源と現在

2022.6.11

講師 岡田淳子（当館元館長）



岡田淳子氏

ロビー展の関連事業として岡田淳子氏に東南アラスカ調査について講演いただきました。東南アラスカは北西海岸文化の北部にあたり、この地域の先住民(トリングット、ハイダ、ツィムシアン)

は、サケ・マスを中心とした海洋資源に強く依存した生活を営んできました。岡田氏は夫の岡田宏明氏と共に1987～90年にかけて東南アラスカのヘクタ島のチャックレイク遺跡、ウォームチャック遺跡、ポートアリス岩陰遺跡とプリンス・オブ・ウェールズ島のハンターベイ遺跡を発掘し、この地域の先住民の海洋適応と北西海岸文化の起源について研究しました。

チャックレイク遺跡は細石刃を伴う貝塚であり、7500～8000年前に既に海洋に適応した生活が営まれていたことが調査により分かりましたが、この頃はまだサケへの依存は見られません。一方、ウォームチャック遺跡は1400年前から19世紀まで人々が居住してきた村落遺跡であり、800年前にはサケを多く利用していたことが分かりました。ウォームチャックには岩絵が残っており、これは北西海岸文化に特徴的な芸術との類似性が見られます。従って、この島の北西海岸文化の起源は1400年ほど前に遡ると考えられます。

ハンターベイも貝塚を伴う遺跡です。標高が一番高い貝塚は5000年前、一番低い貝塚は1400年前のものです。岡田氏によれば、時代が下るにつれて海面が下降し、それに伴い貝塚が形成される標高も低くなっていると考えられ、この傾向は縄文時代の日本の貝塚にも見られるとのことでした。

講座の後半では1996～99年に調査されたアネット島メトラカトラにおける現代のツィムシアンの暮らしが紹介されました。メトラカトラは1887年に英国国教会の宣教師W・ダンカンがカナダからツィムシアンの人々と移住して作った町です。現在、人々はキリスト教だけではなく伝統文化も大事にしながら暮らしています。ダンカンは町の産業作りや若者の教育に力を入れました。現地は林業や水産業が盛んで、調査時点では日本が重要な輸出先となっていました。

メトラカトラの人々は自分たちが一番良いと思うものをよく考え、自己決定することで今も町を発展させています。伝統を守るだけでなく必要なものを外部から取り入れることにも積極的です。こういった姿勢には我々も学ぶことがあるのではないかと岡田氏はまとめられました。

(学芸グループ 野口泰弥)

講座

日本人研究者のアラスカ先史時代研究：その展開とダイナミズム

2022.6.12

講師 平澤 悠（東亜大学准教授）

ロビー展の関連事業としてアラスカ考古学を専門とする平澤氏に、日本人考古学者によるアラスカ研究史、さらにその研究成果が現在の北米考古学に与えている影響についてオンラインで講演していただきました。



平澤 悠氏

日本人考古学者によるアラスカ研究は1960年の明治大学第一次アラスカ学術調査団による、アラスカ半島のホットスプリング遺跡の発掘に始まります。平澤氏は日本人のアラスカ考古学研究を2

種に大別しています。すなわちアラスカ沿岸部における先住民社会の形成過程の研究と、アラスカ初期移住集団の文化的起源をたどる研究です。

前者の研究としては後に当館館長となられた岡田宏明氏・岡田淳子夫妻によって1972～84年に進められたホットスプリング遺跡の継続調査や1987～90年に行われた東南アラスカ調査が代表的です。例えばホットスプリング遺跡の発掘はそれまでほとんど分かっていなかったアラスカ半島の考古学的状況を詳細な調査で明らかにしました。この遺跡からは複数の人骨も出土しており、近年のDNA分析を使った民族の形成や移動の研究に重要なデータを提供しています。

後者の研究は岡田夫妻とも親交の深かった吉崎昌一氏や小谷凱宣氏の研究が挙げられます。吉崎氏は北海道などで見られる荒屋型彫器によく類似した石器が、アラスカでも認められることに注目し、大陸間のつながりを指摘しました。一方、小谷氏はアメリカ大陸への初期人類の進出について、北西沿岸部を通過して南下したのではないかと「海岸ルート」仮説を研究史上、いち早く提唱した他、内陸アラスカで複数の遺跡を発掘しました。これらの遺跡は近年、北米の研究者によって再発掘され、小谷氏の研究が重要なデータを提供しています。このようなアラスカの最初期の人類集団の研究は、現在、平澤氏によっても研究が進められています。今後の研究の進展については会場で講演をお聞きになった岡田淳子氏からも期待の声が寄せられました。

日本人考古学者の研究は北米やアラスカの考古学に現在まで影響を与えており、北米と日本、とりわけ北海道を結ぶ人類移動史については、今後も国際的な共同研究が進められていくだろうとまとめられました。

(学芸グループ 野口泰弥)

ロビー展 西田香代子アイヌ刺繍展

北海道釧路市阿寒町で民芸店を営みながらアイヌ刺繍に取り組んでこられた西田香代子氏の作品と、西田氏の指導を受けたみなさんの作品を紹介します。

- 会期 令和4年(2022年)10月29日(土)～12月11日(日)
- 会場 北海道立北方民族博物館ロビー 観覧無料

◇関連事業

講習会「アイヌ刺繍講習会」

- 日時 2022年10月30日(日)13:00-16:00
- 会場 北方民族博物館 講堂
- 講師 西田香代子氏(アイヌ文化伝承者)
- 対象 一般12名(要申し込み)
- 参加 有料(材料費)



タベストリー

第36回北方民族文化シンポジウム 網走 「北方諸民族文化とジェンダー」

北方諸民族の伝統文化における男女の役割分担と、欧米発祥のフェミニズムやジェンダー平等の価値観との間には大きな違いがみられます。本シンポジウムでは、北方諸民族文化における伝統的なジェンダーの在り方やその歴史の変遷、現状と課題を検討します。

- 日程 令和4年(2022年)10月15日(土)・16日(日)
各日9:00～16:00【参加無料】

■会場 オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000) 大会議室[網走市北2条西3丁目/TEL.0152-43-3704]

■内容 国内外の専門家・研究者による研究発表(同時通訳付き)

■発表者 J. O. ハベック氏(ハンブルク大学民族学研究所[ドイツ])、S. デュデック氏(タルトゥ大学北極研究センター[エストニア])、池田忍氏(千葉大学大学院人文科学研究院)、宇田川妙子氏(国立民族学博物館)、北原モコットウナシ氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)、佐藤円氏(大妻女子大学比較文化学部)、矢内琴江氏(長崎大学ダイバーシティ推進センター)、山口未花子氏(北海道大学大学院文学研究院)

■座長 岸上伸啓氏(国立民族学博物館)、甲地利恵氏(北海道博物館)、呉人恵(北方民族博物館)、中田篤(北方民族博物館)

■主催 一般財団法人北方文化振興協会・北海道立北方民族博物館

◇関連事業 野花南(のかなん) 馬と砂の幻燈音楽会

馬頭琴とサンドアートパフォーマンスの共演

■出演 野花南(嵯峨治彦)[馬頭琴・喉(のど)歌] / 嵯峨孝子

[サンドアート・朗読]

■日時 令和4年(2022年)9月20日(火)18:00開場、18:30開演

■会場 オホーツク・文化交流センター(エコーセンター2000)

エコーホール入場無料(整理券が必要です)

※整理券:オホーツク・文化交流センター、網走市役所、北方民族博物館で配布しています。

INFORMATION

行事報告

◆5月14日(土)はくぶつかんクラブ「北方の言語であそぼう」(講師:山田祥子学芸員)を開催しました。

◆5月28日(土)、29日(日)国立アイヌ民族博物館にて、コラボイベント「動物の毛皮に触ってみようーアイヌ民族と北方民族の毛皮利用を知る・触る」を北極域研究加速プロジェクト(ArCS II)、国立アイヌ民族博物館と共催しました。

◆6月11日(土)研修会「文化財写真入門ー文化財の記録としての写真撮影実践講座」(講師:東京文化財研究所 二神葉子室長、城野誠治専門研究員)を開催しました。

◆6月18日(土)はくぶつかんクラブ「シラカバの皮のランプシェード」(講師:平栗美紅解説員)を開催しました。

◆7月2日(土)講習会「シラカバ樹皮でつくるミニマット」(講師:白樺細工芸家 山辺朋子氏)を開催しました。

◆7月17日(日)北海道みんなの日イベントとして「トンコリ演奏&フラダンス」(トンコリ演奏:TOWA氏、フラダンス:レイアロハフラ網走)を開催しました。



トンコリを演奏するTOWA氏

◆7月30日(土)はくぶつかんクラブ「皮でつくるタオルかけ」(講師:菅原章子解説員)を開催しました。

◆7月31日(日)当館は1991年2月10日の開館以来、90万人目の常設展示入館者を迎えました。



90万人目の入館者となられた
鹿児島からお越しの吉川様(右)

◆8月5日(金)講座「アイヌの歴史・文化に関する授業実践のために」(講師:国立アイヌ民族博物館森岡健治教育普及室長、種石悠当館学芸員)を開催しました。

◆8月6日(土)はくぶつかんクラブ「土器づくり」(講師:塩谷舞解説員)を開催しました。

行事の中止

新型コロナウイルス感染症まん延防止のため、次の行事を中止しました。

◆6月19日(日)第9回ユハンヌス夏至まつり

北方民族博物館だより No.126

令和4年(2022年)9月23日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
一般財団法人北方文化振興協会